

令和4年度「障害者スポーツ推進プロジェクト(実態把握が十分でない障害種の方のスポーツ実施に関する現状把握調査)」 委託事業成果報告書(概要)

調査目的

- 障害の有無に関わらず、生涯にわたって運動・スポーツを実施するための基盤を整備する観点から、実態把握が十分でない、発達障害児・者、医療的ケア児・者の、運動・スポーツの実施の現状を把握するため、文献調査、団体ヒアリング及び個人ヒアリングを行う。
- ヒアリング結果を踏まえて、現状、工夫及び配慮、課題を整理し、全体像を明らかにする。

調査方法

本調査では以下の内容に沿って、ヒアリング調査を実施した。

①対象とする障害種

- 医療的ケア : 医療的ケアを必要とする方で、座位以上が取れる方(知的障害の有無は問わない)
- 発達障害 : 発達障害の方で、知的障害を伴わない方(診断の有無、手帳の有無は問わない)

②団体ヒアリング調査

(1)障害者支援団体(本事業が対象とする障害種の方が活動する団体で、保護者会や当事者の会等の現場団体を指す。)、
(2)障害者施設(本事業が対象とする障害種の方が1～2名以上所属している団体で、運動・スポーツの機会を提供している団体を指す。)、(3)学校(本事業が対象とする障害種の方が1～2名以上所属している学校)、について、障害当事者と直接関わっており、実態をよく理解されている方を対象に、オンラインにてヒアリングを実施し、分析を行う。

③個人ヒアリング調査

7歳以上であり、本事業が対象とする障害種の方に対して、オンラインにてヒアリングを実施し、分析を行う。必要に応じて、障害者施設のスタッフや保護者の同席を求め、可能な限り、当事者が安心してヒアリングに臨めるよう心がけた。

【医療的ケア】団体ヒアリング調査結果概要

現状

※1 本事業において「都市部」とは、東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、愛知県、大阪府、京都府及び兵庫県と定義した。以下同じ。

- 運動・スポーツの提供場所
 - 都市部※1の方が地方部よりも運動・スポーツができる場所の選択肢が豊富、地方部の場合、施設の空きスペースや駐車場を用いている例が見られた。
- 運動・スポーツの種類
 - ボッチャに取り組む団体が多く見られた。また、風船バレーやボール遊び等のいわゆるレクリエーションを実施する団体も多くあった。
- 頻度
 - 学校においては週2～3回、それ以外の団体では週1回の頻度で運動・スポーツの機会が提供されていた。

工夫・配慮※2

※2 団体の属性として、「小中学校」「高等学校」「学校外」(障害者支援団体、障害者施設のうち児童・生徒が利用することが多い場所)、「卒業後」(学校卒業後の方が利用することが多い場所)という4つに区分した。以下同じ。

- 共通点
 - 日常生活や実施可能な運動・スポーツの形に落とし込む工夫、本人の能力に合わせた運動・スポーツの選択肢の充実、運動・スポーツに取り組む目的を丁寧に説明する、医療的ケアがしやすい場所(トイレ、水が使える場所等)の確保、といった点が複数の団体にて共通してみられた。
- 「小中学校」の例
 - 自作の道具や器具を用いて他の生徒と一緒に運動・スポーツができる機会を作る、児童・生徒自身が胃ろう等の器具への配慮を理解できるように運動・スポーツを指導する、等があった。
- 「高等学校」の例
 - オンラインツールの活用、ゲーム要素を取り入れて楽しんで参加できるように設計する、電動車椅子を運動・スポーツの動きに取り入れる、等があった。
- 「学校外」の例
 - 保護者と役割分担しながら運動・スポーツの機会を提供する、一人でも運動・スポーツに参加できるように人員を配置、本人ができることはスタッフは手を出さない、等があった。
- 「卒業後」の例
 - 視線入力でゲームを行うことも運動・スポーツと考えて実践する、水が入らないようにサポートしながらプールや海で活動する、等があった。

課題

- 共通点
 - 専用の道具(バスケット用車椅子等)の準備方法が分からない、安全確保と運動への参加の両立、地域により施設の整備状況が異なる、等があった。
- 「学校外」の例
 - 体温調整が難しい方が多いが室温調整できる場所が少ない、競技色の強い団体が多く楽しめる雰囲気のある場所が少ない、等があった。
- 「卒業後」の例
 - 余暇活動として位置付けられるため優先度が低くなってしまう、作業所等で運動・スポーツの機会を作りにくい、等があった。

【医療的ケア】個人ヒアリング調査結果概要

現状

- **運動・スポーツの場所**
 - 都市部、地方部ともに、自宅で運動・スポーツに取り組む方が多かった。学校やリハビリテーションセンター、地域の運動施設を利用するケースもあった。
- **運動・スポーツの種類**
 - ボッチャに取り組む方が多かった。自宅で階段の上り下り、掴まり歩き、自宅周辺の散歩に取り組む方が多かった。
- **頻度**
 - 自宅では、週1回～毎日、1日20分～2時間程度、運動・スポーツに取り組んでいる方が多かった。施設利用の場合、週1回～月1回、1時間程度、取り組んでいる方が多かった。

工夫・配慮

- **共通点**
 - 日常生活の中に、運動・スポーツの要素を組み込む工夫をされている方が多かった。
 - 例えば、友達等と一緒にマッサージ運動やマット運動を行う、お風呂上がりのストレッチを行う等の工夫があった。
 - 胃ろうによって本人が傷つかないように、鉄棒運動等の際に腹部を圧迫しないように、日頃の動きに注意しながら、運動・スポーツに取り組んでいる。
- **個別の工夫及び配慮の例**
 - 家の中での四つん這い運動、おもちゃを使った遊びも運動・スポーツの機会と捉えて、日常生活に取り入れる工夫をしている。
 - 車椅子の利用に伴い、褥瘡ができないように自身で管理しながら、運動・スポーツに参加している。
 - 持ち運び可能な吸引機を、一緒にサポートする人が持ち運ぶことで、ボッチャに参加できている。
 - 顔色が悪くなったら酸素吸引をしてもらう、胃ろうについてうつ伏せにならないように指導してもらう、という学校やデイサービスでの助言のおかげで運動・スポーツに参加できている。

課題

- **共通点**
 - 家族の付き添いが運動・スポーツに取り組む上で基本となっており、運動・スポーツの機会を継続する上での課題となっている。
- **個別の課題の例**
 - 痰の吸引は本人にとっては日常生活の一部であるが、周囲の理解が得にくく、体調が悪いように見えてしまい、運動・スポーツへの参加を過剰に断られることが多い。
 - 身体活動を改善する機能を有した車椅子を使って競技を行うため、片道3時間の移動をする必要があり、移動サポートの人員が不足している。
 - 中心静脈の輸液製剤とポンプを常にリュックに背負っているため、夏場は暑く、運動・スポーツに参加しにくい。
 - 医学的には問題ないにも関わらず、人工鼻をつけているため、砂が混入しないように屋内の運動・スポーツしか学校でできない状況になっている。

【発達障害】団体ヒアリング調査結果概要

現状

- 運動・スポーツの提供場所
 - 都市部及び地方部において、運動・スポーツができる場所の選択肢の違いは少なく、学校、民間のスポーツ施設等が使われているケースが多くあった。
- 運動・スポーツの種類
 - 多くの団体でポッチャに取り組んでいたが、他の種目(卓球、バレーボール、テニス等)の参加機会を提供している団体も多くあった。
- 頻度
 - 学校においては週2～3回、それ以外の団体では週1回の頻度で運動・スポーツの機会が提供されていた。

工夫・配慮

- 共通点
 - 勝ち負けがつかないルールへの変更、一人一人のできたことを褒める等をして参加意欲を高めている。
 - 本人の認知特性や考えの癖等を適切に理解し、スモールステップで指導する等、本人に伝わりやすく、見通しが立ちやすいようにしている。
 - ラジオ体操、散歩、ノルディックウォーク等、参加のハードルを下げ、選択肢を多く提示することで、運動・スポーツを選べるようにしている。
- 「小中学校」の例
 - 体育の授業で個人種目が選べる、上級コース／初心者コースを設置する等し、参加しやすい環境を作っている。
- 「高等学校」の例
 - ガラッキー、カローリング等のニュースポーツを取り入れ、参加者全員が初心者の中で運動・スポーツに取り組む環境を作っている。
- 「学校外」の例
 - 他の利用者とは適切な距離感を保ちにくいケースにおいて、スタッフがサポートに入り、利用者全員が安心して利用できる環境を作っている。
- 「卒業後」の例
 - 自身の障害の特性や体の稼働領域について理解してもらうことから、運動・スポーツを始めてもらうようにしている。

課題

- 共通点
 - 人によって異なる認知特性を持っている人が多く、スタッフ側がそれを理解するだけの知識や経験が不足しており、人数も足りない。
 - サポートする大人の意識変革の難しさがある。本人達以上に、大人が運動・スポーツに対してブレーキをかけるケースが多い。
- 「高等学校」の例
 - 地域のクラブやサークルは大人のメンバーが多く、高校生が参加できるような場所が増えると、部活動以外の場で運動・スポーツに取り組める。
- 「卒業後」の例
 - 小集団での指導やルール改変をしながら運動・スポーツに参加してもらっているが、卒業後、同じような配慮をしてくれる場所が少なく、運動・スポーツの機会が減ってしまう。

【発達障害】個人ヒアリング調査結果概要

現状

- 運動・スポーツの場所
 - 都市部、地方部ともに、自宅、近所の公園、地域の運動施設を利用して、運動・スポーツに取り組む方が多かった。
- 運動・スポーツの種類
 - 散歩、自転車、筋力トレーニングのように個人で取り組める運動・スポーツを行うケースもあれば、卓球・テニス・サッカー等のチームスポーツに取り組むケースもあった。
- 頻度
 - 週1回～5回、時間は30分程度～2時間程度で運動・スポーツに取り組むケースが多かった。

工夫・配慮

- 共通点
 - 教え方やフィードバック、褒められることにより、楽しさを感じることができている。
 - 本人の体力や運動・スポーツのレベルに合わせて無理のない形で楽しみながら運動・スポーツに取り組むという環境のおかげで継続できている。
 - 一人で取り組める運動・スポーツ(ラジオ体操、ランニング、ウォーキング等)を本人や保護者が積極的に選ぶようにしている。
- 個別の工夫及び配慮
 - 賞状を集めると景品と交換できる等、運動・スポーツへの参加インセンティブが具体的に提示されており、参加意欲が増している。
 - 楽しみながらステップアップするという指導計画のおかげで、遊びながら継続することができている。
 - できなかったことが、できるようになったという本人の成長を意識して、褒めるコミュニケーションを取っている。
 - 集中しすぎてしまうため、スケジュールを立てて、決められた時間、運動・スポーツに取り組めるように指導してもらっている。

課題

- 共通点
 - 障害特性を受け入れてくれるサービスやアプリケーションが少なく、指導してくれる人も少ないため、運動・スポーツに参加しにくい。
- 個別の課題
 - 普通クラスに通っていた期間が長く、体育において、運動が得意でない児童でも使いやすいようなラケットやボールを使ったことがなく、痛さや恐怖心が定着してしまっている。
 - 運動・スポーツの場を提供しているところの多くが、競技性や真剣度が高いため、ついていけないという感覚になり、参加できていない。